

水トラストニュース

2024.6 No.50



もくじ

自分のケーキを切り分けること ～アウシュビッツ強制収容所を訪れて～1
村越造園への道ー5 & ー口メモ4
2024年度定期総会案内7

自分のケーキを切り分けること

～アウシュビッツ強制収容所を訪れて～

木亦 穂高

2024年1月11日、私はポーランドのオシフィエンチムという町にいた。当時、ワーキングホリデーを続けていた。ハンガリーのブダペストからスタートした旅は、オーストリアのウィーンを挟み、ポーランドを最終目的地としていた。しかし、目的は首都・ワルシャワではない。ポーランド第二の都市・クラクフからバスで1時間半ほどの場所にあるこの小さな町は、第二次世界大戦中、ドイツ語で「アウシュビッツ」と呼ばれていた。

旅の最終目的地をアウシュビッツにした理由はいくつかあるが、最終的にはヨーロッパで出会った友人たちの後押しが決め手となった。ダブリンのユダヤ系の大学に通っていた彼女は、国や宗教に関わらず向き合うべき事実だと言い、高校の修学旅行で訪れたというイタリア人の彼は、あの時見た光景は未だに強く脳裏に焼き付いている、と口にした。

その日の夜、さっそくインターネットで「アウシュビッツ 行き方」と検索する。過去にその場所へ訪れた日本人のブログを眺めている内に、アウシュビッツには日本人唯一の公認ガイドがいることを知った。中谷さん、という方で応募手段は直接のメールしか無いらしい。ガイドをお願いしたいとメールを送ると、次の日には参加日を調整するメールが返ってきた。

当日の参加者は私含めて6人おり、新婚旅行でヨーロッパを旅している夫婦、クロアチアに留学で来ている大学生など私以外は皆20代だった。アウシュビッツには年間200万人以上の人を訪れ、中谷さんはその内の2万5千人ほどの日本人に向けて日本語ガイドを実施しているという。私が参加したのは13時から3時間のツアーだったが、その日は午前中にも既に一組案内しており(多い日は3部構成の日もあるそう)、特別な事情が無ければ毎日この場所に立つそうだ。その日は、日中でも気温がマイナス15度近くまで下がっており、むき出しになっている顔が寒さで痛む。中谷さんは「今日はアウシュビッツ日和だ」と微笑みながら参加者に入場チケットを配っていた。

厳重なセキュリティを通過すると、イヤホンを受け取り、耳に装着した。冒頭に中谷さんは、3時間で2箇所の収容所を回ることに、とにかく一つでも多くのことを伝えたいので歩きながら説明することをマイク越しに伝えてくれた。

最初に訪れたのは第一強制収容所で、入り口には有名な「ARBEIT MACHT FREI(働けば自由になる)」の一文が掲げられていた。約30の棟が立ち並び、平均して13,000～16,000人、多いときで20,000人が収容されていたという。アウシュビッツと聞くとユダヤ人が収容されていたイメージが強いが、第一強制収容所の被収容者の内訳はソ連兵捕虜、ドイツ人犯罪者、同性愛者、ポーランド人政治犯が主となっていた。ナチスは、彼らに属性ごとに色分けしたバッジを付けさせ、分かりやすくヒエラルキーを作ることで、被収容者同士でも監視をし合い、集団での反抗を抑止していたという。

いくつかの建物は展示スペースとしても使われており、被収容者の写真と共に、彼らが家から持っ

てきた手荷物(かばん、靴、メガネ、食器など)が山積みになっていた。よく見ると名前の入ったものも多くあり、一つ一つの物の背景に一人一人の人生があった事実をまざまざと感じる。中谷さんは名前が入った小さな靴を指差しながら、「この場所に来て、今皆さんが感じていることは、きっと教科書の写真だけでは分からないこと。それが、ここで私がガイドを続ける理由です」と言った。

第一強制収容所を見て回りながら、中谷さんは「マキシミアノ・コルベ」というポーランド人神父の話聞かせてくれた。コルベ神父は日本の長崎でも布教活動を行っていたカトリック司祭で、1939年にナチスへの批判を理由に逮捕された後、アウシュビッツ強制収容所へと送られた。1941年7月末、収容所から脱走者が出たことが発覚し、連帯責任として無作為に選ばれた別の10名に餓死刑が言い渡される。その中には妻子を持つポーランド人の男性も含まれており、事情を知ったコルベ神父は、自ら進んで彼の身代わりを申し出た。「私が彼の身代わりになります、私はカトリック司祭で妻も子もいませんから」

収容所内にはコルベ神父が最期を迎えた地下牢や、彼をモチーフにした絵画も展示されており、中谷さんは日本とも縁があった彼の生き様を知って欲しい、と彼が登場する遠藤周作の著書「女の一生」を紹介してくれた。コルベ神父に助けられたポーランド人の男性がその後どうなったかという、なんと終戦後に奇跡的に妻と生きて再会することができたそうだ。1995年に93歳で亡くなるまで、彼は数少ないアウシュビッツの生存者として、世界各地でコルベ神父についての講演を行ったという。

ツアーの後半は、専用バスで10分ほどの場所にある第二強制収容所「ビルケナウ」を訪れた。東京ドーム約37個分の広大な土地に300以上の施設が立ち並び、ピーク時には9万人ものユダヤ人が収容されていた。死の門と呼ばれる中央衛兵所からは、アウシュビッツの象徴ともいえる「鉄道引込線」が伸びており、ヨーロッパ各地から貨物列車で多くのユダヤ人が運ばれてきたという。列車を降りた後、強制労働に適していないと“選別”された多くの人は、何も知らされないままガス室に誘導された。証拠隠蔽のために爆破されたガス室の前で中谷さんはそう教えてくれた。敷地内にある簡素な木造施設(バラック)の中には、3段ベッドが所狭しと並んでおり、ヒートテックを重ねても感じる刺すような寒さの中、当時の被収容者たちはここでどんな思いで眠りについていたのか、静かに思いを馳せた。

ツアーも終盤に差し掛かった頃、参加者の女子大学生が中谷さんに質問をした。

「中谷さんは、競い合うことについてどう思いますか？」

中谷さんは少し考えた後、こう続けた。



第一強制収容所にて
有名な門の前でガイド中谷さんの説明を受ける



第二強制収容所にて
実際に輸送に使われた貨物車両

「競争は人間の本能的なものだし、人が成長するためには必要だと思うかな。大事なのは勝った後、どうするか、かと」雪が舞う収容所の広大な土地を歩きながら、皆少しずつむいて中谷さんの話に集中していた。

「例えばホールケーキがみんなの目の前にあって、勝った人が食べていいでしょう。その時にね、勝った人がケーキを独り占めするのではなく、今いる人数分に切り分けて、他の人にも分けてあげたら、どう思う？きつと勝った人も、最後に残った自分のケーキをみんなと一緒に食べる瞬間って幸せだと思うんだよね。自分が一生懸命手に入れたものを、いかに他人のために使うか、それこそが豊かさだと思います」

3 時間のツアーを終えた後、再びバスでクラクフに戻った。窓から見えるのどかなポーランドの田舎町を眺めながら、遠い国の、自分が生まれるよりもはるか昔の出来事、だったはずの点が、2024 年に生きる日本人の自分と強く結びつき始める。それは、アイルランドで受けたアジアンヘイトの経験もそうだろうし、コロナ禍の日本において身を持って感じた閉塞感、人種や病気への差別も関係しているだろう。優生思想を持った犯人が障害者施設で起こした大量殺害事件も、他のどこでもない、日本で起きたことだ。

中谷さんは最後にこう言ってツアーを終えた。
「私はこのツアーを通して正解を押し付けるつもりはありません。皆さん一人一人が思ったこと、感じたことこそが正解であり、その現実に対して向き合い続けてくれたら嬉しいです」
この言葉を思い出し、今日も文字にする。誰かと話をする。そしてまた、あの日のことを考える。これが、私なりに自分のケーキの切り分けること、なのだ。

2024 年 5 月 24 日に、今年のアカデミー賞で国際長編映画賞を受賞した映画「関心領域」が公開されます。アウシュビッツ強制収容所の横で暮らしていた実在の人物がモデルになっています。お時間許す方は、是非。(僕も観に行きます！)

◆ あらすじ
空は青く、誰もが笑顔で、子供たちの楽しげな声が聴こえてくる。そして、窓から見える壁の向こうでは大きな建物から黒い煙があがっている。時は 1945 年、アウシュビッツ強制収容所の所長とその家族は、収容所の隣で幸せに暮らしていた。スクリーンに映し出されるのは、どこにでもある穏やかな日常。しかし、壁ひとつ隔てたアウシュビッツ収容所の存在が、音、建物からあがる煙、家族の交わす何気ない会話や視線、そして気配から着実に伝わってくる。壁を隔てたふたつの世界にどんな違いがあるのか？ 平和に暮らす家族と彼らにはどんな違いがあるのか？そして、あなたと彼らとの違いは？

村越造園への道 -5

村越 久弥

1月～3月は庭木の剪定作業の閑散期で受注が少なかった為、課内の内装係りへ応援で食いつなぎでした。作業内容は寮・社宅室内改装の為、天井・壁紙・フローリング材をカッターナイフとスクレーパを使い剥がすのです、スムーズに剥がれれば良いのですが、剥がれないとスクレーパで少しづつゴリゴリと地道な作業です。ただ室内なので雨風には曝されないのが身体は楽ですが、手のが壁などにこすれて擦り傷・切り傷があちこちに出来ました。剥がし作業のよし悪しで貼り付け作業に影響が出るためどこまで仕上げるかが重要で、奥は深い作業で良い経験になりました。

4月に新人は1名入りましたが社員が1名移動・1名退社、パート1名退社で戦力は減少しましたが受注内容は減らないため作業量が増加です。剪定作業を始め1年が経ちましたが下っ端なので刈込み(刈込み鋏でバサバサ)剪定が主となり午後の作業に入るとやはり剪定枝の処理業務となるので、与えられた作業を時間内で納得が行く様に仕上げるか、早く終わらせて抜き剪定(剪定鋏でチョキチョキ)をやらせて貰える様にアピールするかは当日の親方により使い分けをして過ごすのです。親方が社員だと抜き剪定をやらせて貰えないので終了時間がギリギリか残業になる。教える気が無い、仕事を取られたく無い、信用が無い。親方がパートで抜き剪定をやらせて貰える事が有る時はルンルン気分で作業も進み終了時間も早くなり一服してからの帰社となります。

松が2本あるお宅に3人で入った時に親方より刈込み剪定後、松の剪定を手伝う様に指示がありイソイソと作業を進め松の剪定に取掛ったが、『なんじゃこりゃ！』松の芽が一本の枝から複数個出てモサモサの状態でしたので同じ松の天端(てんば)を剪定中の親方に芽が爆発していますが二芽



写真-1件目剪定前



写真-1件目剪定後

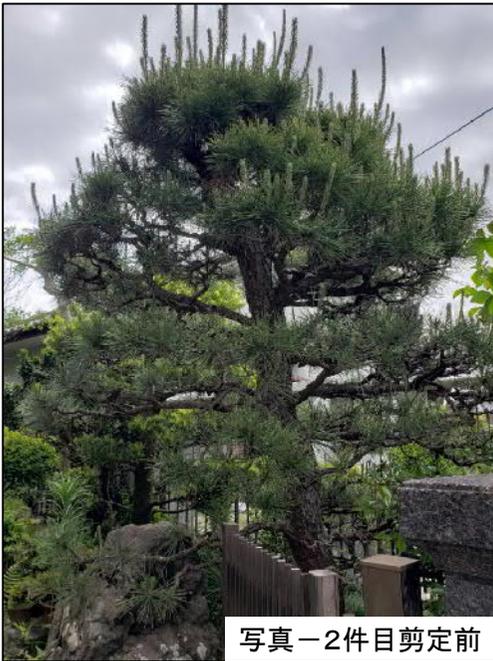


写真-2件目剪定前

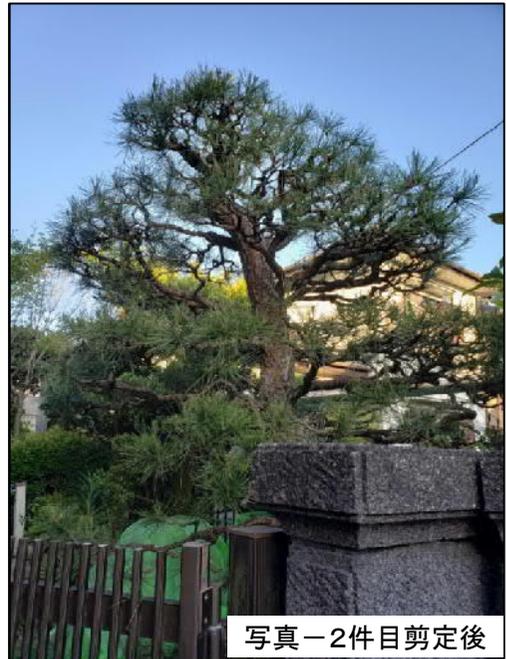


写真-2件目剪定後



写真-1件目の部分



写真-2件目の部分

にしますか？と尋ねたら、そうしてとの回答でしたのでその様に剪定しますが一枝を掻き分けて更に芽を掻き分け残す芽を切らない様に木鋏を入れるので時間が掛ります。上から見ていて、もっと早くしないと終わらんぞ！と檄が飛んで来ます、『ハイ！』と返事しながら必死にチョコチョコキ。

親方も中間部の剪定に入った時に『なんじゃこりゃー前回誰がやったんだ!!』と声が出た、物静かな親方が『ア・ウー・モー』うめきながら剪定です、早々に『やってられない！今日は残業だ！』ボヤキが入りました。手直しもなく終わり以後少し私への見方が変わった様に感じています。

上の剪定に入る前に近所の松を剪定をする機会を貰いました、が、なんとまた爆発した松です。一日で終わる心算で始めましたが、一日では終われず翌日の半日を要しました。しかし納期もないので手間を掛け仕上げる事が出来ました。その後3回目の松剪定を近所でさせてもらいましたが又しても爆発、今度は六時間程でしあげられたので進歩です。 ☆日々ボチボチと楽しんでいます。

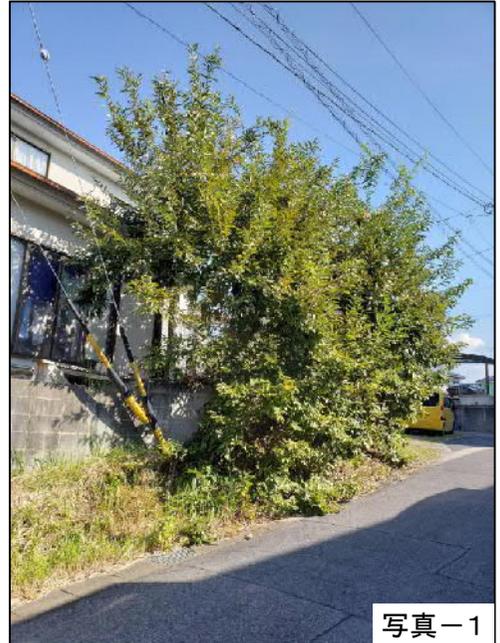
《一口メモ》

★下記の写真は自宅のクヌギの樹です。剪定の仕方により枝の伸び方が変わるかを確認しました。

《爆発をしない様にしたい》

- ・何も考えずに切る。少々時間は掛かるが必要な枝か。
 - ・どの方向に枝を伸ばすか等を考えて切る。
- 1枚目は適当に剪定したので枝が上方に好き放題に伸びて架線迄届く状態です。
- 2枚目は上方に伸びない様に葉芽の方向を見定めて剪定をした状態。
- 3枚目は現在の状態で枝が横方向、下方向に向いています、下側は地に這っているものも有ります。

2024. 05. 28



2024 年度定期総会のご案内

時：6月23日（日）15：00～

場所：名古屋市千種区今池3-12-3 丸美タウンマンション今池205号

（地下鉄今池下車：徒歩5分、JR千種下車：徒歩10分）

詳しくは下記連絡先にお問い合わせください。

議題：2023年度事業報告および決算報告

2024年度事業計画および予算

その他の報告

気軽に、楽しく 山仕事に参加しませんか

とき：毎月第2土曜日およびそれに続く日曜日

集合場所：御嵩町・中公民館（名鉄広見線・御嵩口
下車、すぐ）

集合時間：午前10時

参加の方法：電子メールで申し込んで下さい。

申し込み・問い合わせ先：

e-mail: mitake500np@yahoo.co.jp



シイタケの菌打ち

表紙の絵は早川しょう子さん作

発行

特定非営利活動法人 みたけ・500万人の木曾川水トラスト

〒464-0850 名古屋市千種区今池3-12-3

丸美タウンマンション今池205（←2020年11月より）

郵便振替00840-5-137369（←2018年5月より）

URL <http://mitake500np.na.coocan.jp/>

e-mail mitake500np@yahoo.co.jp